

アボリショニズムはソーシャルワークの何を問題化するか

ー反レイシズムと歴史的・構造的不正義の視点からー

○明治学院大学大学院 博士前期課程 氏名 佐伯 賢 (会員番号 010352)

キーワード：アボリショニズム・反レイシズム・批判的ソーシャルワーク

1. 研究目的

人々に抑圧をもたらす歴史的・構造的不正義に対してソーシャルワークは一定程度特別な責任があり挑戦すべきであるという考えは、現行のグローバル定義によって基礎づけることが可能であろう。本報告は「レイシズム」に着目するが、現代社会の分析にこの概念が用いられるのは、在日朝鮮人、アイヌ、琉球、そして難民申請者（庇護希望者）、技能実習制度（育成就労制度）の問題などであり、植民地主義に根差す歴史的な広がりの中での国家の形象の変化や政策と切り離せない問題群である。これらの問題とソーシャルワークの関係を考えるとき、ソーシャルワークもまた社会福祉士制度を通じた統制を受けていることを無視できないだろう。それゆえ、レイシズムとソーシャルワークの関係を考察するには、国家を分析の中に位置づけるとともに歴史的な視座を持つ必要がある。

本報告の目的は、レイシズムの再生産におけるソーシャルワークと国家の共犯関係を視野に入れ、日本のレイシズムに関わる歴史的・構造的不正義にソーシャルワークが挑戦する上で、アボリショニズムの思想はどのような示唆をもたらすのかを明らかにすることである。

アボリショニズムを参照することが妥当だと思われるのは、国境廃絶論に見られる「日常のなかに現れる国境」という視点、つまり領土の外縁にのみ国境があるのではなく福祉制度も含めた様々な位置に国境があるとする認識や、監獄廃絶論が児童保護システムを人種化された人々への「ポリシング」として捉えている点などから、国家とソーシャルワークと、レイシズムの構造との関係を分析しうる枠組みを提供すると考えられるからである。

先住民のこどもたちへの暴力的な同化政策に対するソーシャルワークの加担が明らかにされたことが反抑圧ソーシャルワークの発展を基礎づけたが、ブラック・ライブズ・マター(BLM)運動もまたこうした動向を後押しした。BLM運動の思想的な支柱であるアンジェラ・デイヴィスは監獄廃絶を目指す運動体であるクリティカル・レジスタンスの共同設立者であり、BLMとアボリショニズムの思想は深い結びつきがある。英語圏ではソーシャルワークとアボリショニズムの関係を考察する動きがみられ、抑圧的な国家に抗する実践のスペースを広げるとともに、ケアの供給システムをいかに公正なものにしていけるかが検討されている。ポストコロニアルな構造における不正義が根深く残る日本社会で、こうした議論に呼応し取り組んでいくことは、アクチュアルな課題である。

2. 研究の視点および方法

監獄廃絶論、国境廃絶論における言説を参照するとともに、「アボリショニスト・ソーシャルワーク」と形容できる一群のソーシャルワーク研究を参照し、論点を抽出していく。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会倫理規定を遵守したものである。本報告に関連して開示すべき COI 関係にある企業等はない。

4. 研究結果

アボリショニズムの分析において「監獄化する社会」は、新自由主義とグローバル化の動向の中で、国境を越えて資本が自由に移動し、とりわけグローバル・サウスの経済特区における労働環境の悪化をもたらし、グローバル・ノースへの国際移動を促すこと、そしてケアが削減されレイシャルに分断された国家の内部で、人々が人種化され監獄へと追いやられていく構造上のプロセスとして理解される。グローバルな政治経済的分析を踏まえて国家の法制度を分析することにより、その制度が本質的にどのような機能を持っているかを明らかにしようとする点に特徴がある。

アボリショニズムがこうした構造批判において有用な視座を提供しながら、同時にソーシャルワークそれ自体への批判的省察を要求していることは、児童保護システムの分析を見ることで理解できる。人権や安全という旗印の下で、客観性や科学性を掲げて実践される児童保護の実践を「ファミリー・ポリシング」として捉え、人種的・階級的の不平等を再生産していると批判する点は、ソーシャルワークの知・実践・制度に埋め込まれたレイシズムを問うものである。

5. 考察

アボリショニスト的な変革において「ケア」は極めて重要である。ソーシャルワークがその一角を担うソーシャルサービス供給が、抑圧の源泉になるのではなく、正義の下に実践される世界を想像することが必要だ。日本のソーシャルワーク研究において国家との関係が批判的に問われることは少なかったように思える。国家装置の一部であるソーシャルワークが、自らに埋め込まれたレイシズムを批判的に分析し、ソーシャルサービス供給の公正な形態を構想するのであれば、ソーシャルワークと国家の関係を批判的に分析することが必要である。アボリショニズムはその契機をもたらすものである。

文献

Bradley, G.M., de Noronha, L. (2022) Against Borders: The Case for Abolition. Verso. (=2025, 梁英聖,

柏崎正憲訳『国境廃絶論：入管化する社会と希望の方法』岩波書店)

Davis, A. (2003) Are Prisons Obsolete?, Seven Stories Press. (=2008, 上杉忍訳『監獄ビジネス：グローバリズムと産獄複合体』岩波書店)